

「箱庭生成の自律性」に関する探索的研究

池 田 有 加 里

臨床心理学研究 東京国際大学大学院臨床心理学研究科 第16号 抜刷
2018年（平成30年）3月31日

が) 寂しい, 険しい感じがします。(中略) ちょっと暖かいとかキラキラとかそういうほんわかしているイメージを(ビー玉を置くことで)向かわせていくみたいな感じ] と他のミニチュアを置くことで強いイメージをやわらげる方法がみられた。一方で, [ライオンとか虎とか迷いました。(中略) 置くとなんか壊されてしまうような怖さがあります] と強すぎるイメージをおさめることができないものは箱庭内には置けないようである。

VII. 総合考察

1. コアイメージの持ち方

河合(1969)は「箱庭の表現の中に, 何らかの意味でテーマ, あるいは主題と呼べるようなものを見出せることが多い」と述べているよう

に, 箱庭には中心となるイメージがある場合が多い。そのコアイメージは個人的な課題や内界を映し出しているものだと考えられる。コアイメージの持ち方について, 本研究では三通りみられた。一つ目は, 一つのコアイメージのまま制作していくもので, 基本的にはそのコアイメージに沿って箱庭が制作される。二つ目は, 最初は制作者の中でコアイメージがはっきりと浮かんでこないが, 制作をしているうちに中心となるイメージがだんだんとはっきりしてくるものである。制作しているうちにコアイメージが湧いてきて, 制作者の作りたかった箱庭ができあがってくる。三つ目はいくつかのコアイメージが同時にあるものである。どのコアイメージも制作者にとっては重要なものである。コアイメージの持ち方は制作者や制作した作品によって異なると思われ, 中心としたイメージ

	概念名	定義
1	コアイメージとの出会い	箱庭の中心となるイメージが湧いてくる
2	イメージのきっかけとなるミニチュア	ミニチュアからイメージが湧いてくる
3	連想の広がり	箱庭から受ける印象が活発になる
4	イメージとのすり合わせ	ミニチュアや箱庭場面とイメージを照らし合わせて制作する
5	ミニチュアに惹かれる	ミニチュアを見た時に惹かれ置きたいと思う
6	代替物	イメージ通りのものがない場合にはそれに順ずるものを使う
7	人生にかかわる場面	制作者の人生に関わるものが登場する
8	ミニチュアへの投影	ミニチュアへ制作者のイメージを投影する
9	違和感	箱庭には必要だが、制作者がそのままでは置けないもの
10	違和感をおさめる	強すぎるイメージをやわらげるために対処する

が存在しそれに沿って展開していくことは共通している。本研究では心理療法としての設定ではない上に一回のみの制作だが、心理療法の場においてもこのコアイメージがどう展開していくのかに注目することは重要なことと言える。

2. イメージの広がり方

箱庭制作におけるイメージの広がり方についてはミニチュアを見た時にイメージが湧いてくことや制作している箱庭場面からイメージが活性化されるように感じる事が挙げられる。石原（2015）は、制作者はミニチュアを単なるモノとして捉えているのではなく、イメージとして体験しており「モノを単なるモノとして体験するに留まらず、イメージを交錯させて体験する」と考えられ、箱庭内に置く時には単なるミニチュアとしてではなく制作者のイメージも伴ったものとなると述べている。ミニチュアは制作者のイメージが伴うもので、時には制作者の強いイメージが投影されることもある。本研究では海辺に直立した姿勢のスーツの人を置いて

ている制作者がおり、〔リラックスしているような感じ〕と個人のイメージを投影している様子が見られた。そういったミニチュアは場面にそぐわないが制作者の中ではそこに置くことに違和感を感じていなかった。箱庭制作の中にはより強いイメージを投影されたミニチュアが登場することも多いと考えられる。また、本研究では人生に関わる場面を制作したり、連想したりする制作者もいた。河合（1969）によると意識的に自分が箱庭内に登場していると把握している場合や「理想像や未来像、無意識的に生じて来る面などを含んでいる場合」があり、箱庭作品全体が「自己像」と言うこともできると言う。制作者の幼いころのことやできなかったことなど制作者の人生に関わる表現は臨床の場面でも重要なことと言える。

3. 「箱庭生成の自律性」について

コアイメージに伴ってイメージが広がっていき、時には制作者も予期しない箱庭を作ってしまうことがある。それは箱庭制作には意識的な

ものだけではなく無意識的なものも関係しているからだと思われる。そのため、制作者もどうしても置きたい、箱庭にこのミニチュアが必要だという気持ちが湧き、それを箱庭内にどう置くかが課題となっていく。

本研究ではイメージとミニチュアや箱庭場面をすり合わせて箱庭を制作していくということを「箱庭生成の自律性」と呼んでいる。本調査協力者も箱庭制作をする際にはミニチュアの棚をじっくりと眺め、時には手に取る様子が観察された。語りからもミニチュアから制作者が想起するイメージと箱庭のイメージとをすり合わせていると考えられる。また、箱庭場面においては実際にミニチュアを置いてみて合わないと感じることや、この場所ではないと感じ、自分のイメージと合うミニチュア、場所を模索しているようであった。この模索を通して、まだ意識化されていないはっきりとしない制作者の内的イメージを感覚で模索していくことで、箱庭場面からも制作者に働きかけが起き、さらに内的イメージが活性化していくのだと考えられる。制作者は箱庭制作を通すことで、自分の内的イメージと対峙しそのイメージが広がっていくことや新たなイメージを発見することが箱庭療法の治療の一因だと推測される。

イメージとのすり合わせをした際には物理的にミニチュアがないことがある。その際には、置きたいイメージに順ずるミニチュアを選んでおり、ミニチュアがなくとも箱庭内に置けるようにするための妥協であると言える。

4. 違和感をおさめる方法

「箱庭生成の自律性」には箱庭制作の中で違和感をどうおさめていくかということも重要になる。本研究でも自分でも置こうと思っていないのにミニチュアに惹かれて置くことがあり、置く際には違和感を感じることもある。河合（2002）は箱庭を制作している時に制作者の意識的なコントロールされたものだけではなく、制作者も意図しない思いがけないものが生

じてくるゆえに箱庭における自己治癒力が可能になると言う。制作者にとっては違和感を感じながらも置かざるを得ないものであり、置くためには違和感をおさめなければならない。本研究では違和感をおさめるために三つの方法がとられていた。一つ目は箱庭場面を区切っておさめる方法である。二つ目は距離を取ることで違和感をやわらげる方法である。三つ目としては他のミニチュアを置いて違和感をやわらげる方法がみられた。前述した箱庭体験の先行研究でも千葉（2015）が箱庭制作後に箱庭のイメージを制作者が内在化すると述べている。制作者にとって強すぎるイメージはそのまま内在化しにくく、上述したような三つの方法を使って違和感をおさめている。箱庭におさめることができる形にすることによって、制作者にとっても制作した箱庭を内在化しやすいようにしているとも言える。

VIII. 今後の課題

本研究ではイメージとミニチュアや箱庭場面をすり合わせて箱庭を制作していくという「箱庭生成の自律性」に焦点を当て、箱庭体験過程を明らかにした。その結果、制作者の中で起こるイメージの広がり方や箱庭制作においてイメージとのすり合わせは非常に重要な要素であることが理解できた。しかし、本研究は箱庭体験に関する探索的研究であり、今後も詳しく検討していく必要がある。さらに本研究は一回のみ制作でのデータなため、複数回箱庭制作を行った際にはどういった心の動きが制作者に見られるのかを概観したものではない。本研究でも示したように、制作者にとってはイメージとミニチュアや箱庭場面をすり合わせ、箱庭内におさめられるようにすることこそ、箱庭療法の本質だと言えるため、連続した箱庭制作の中ではどのようにイメージが展開していくか、制作者の心はどう揺れ動くのかを今後検討していく必要がある。

注

- 1) 東京国際大学人間社会学部 田中信市

引用文献

- 千葉友里香 (2015). 箱庭制作後における箱庭と作り手との関係性の変化について——作り手の変容に関する質的研究——箱庭療法学研究, 28 (2), 41-53.
- 後藤美佳 (2004). 箱庭表現に伴う「びったり感」のPAC分析 箱庭療法学研究, 16 (2), 15-30.
- 平松清志 (2001). 箱庭療法のプロセス——学校教育臨床と基礎的研究 金剛出版.
- 石原 宏 (2002). 箱庭制作者の主観的体験に関する研究——「PAC分析」の応用と「一つのミニチュアを選び、置く」箱庭制作 岡田康信 (編集) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズII 箱庭療法の本質と周辺, 57-69, 至文堂.
- 石原 宏 (2003). 箱庭制作過程に関する基礎的研究——「一つのミニチュアを選び、置く」という箱庭制作の数量的データの検討—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 455-467.
- 石原 宏 (2015). 箱庭療法の治療的仕掛け——制作者の主観的体験から探る—— 創元社 63-72.
- 伊藤真理子 (2005). イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程 箱庭療法学研究, 17 (2), 51-64.
- 片畑真由美 (2006). 臨床イメージにおける内的体験についての考察——箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 52, 240-252.
- 片畑真由美 (2007). 箱庭制作における制作者の「体験」についての考察——調査の枠内で見られた一事例から 岡田康伸・皆籐 章・田中康裕 (編集) 京大心理臨床シリーズ4 箱庭療法の事例と展開, 70-79, 創元社.
- 河合隼雄 (1969). 箱庭療法入門 誠信書房.
- 河合俊雄 (2002). 箱庭療法の理論的背景 岡田康信 (編集) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズI 箱庭療法の現代的意義, 110-120, 至文堂.
- 木村晴子 (1985). 箱庭療法——基礎的研究と実践 創元社.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い 弘文堂.
- 近田佳江・清水信介 (2006). 制作者の主観的体験からみた箱庭表現過程 北星学園大学社会学部北星論集, 43, 35-57.
- 楠本和彦 (2011). 箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み 佛教大学大学院紀要 教育学研究篇, 39, 103-120.
- 宮川貴美子 (2005). 高齢者による箱庭制作の試み 箱庭療法学研究, 17 (2), 33-50.
- 岡田康信 (1969). SD法によるサンド・プレイ技法の研究 臨床心理学研究, 8, 151-163.
- 岡田康信 (1984). 箱庭療法の基礎 誠信書房.
- 岡田康信 (1993). 箱庭療法の発展 誠信書房.
- 大石真吾 (2010a). 箱庭制作における砂の作用に関する一研究——作り手の主観的体験にもとづいて—— 箱庭療法学研究, 22 (2), 63-72.
- 大石真吾 (2010b). 箱庭制作という場の特徴に関する一考察——2つの場をめぐる作り手の体験に着目して—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 209-221.
- 斉藤紫をん (1992). 不登校児の箱庭表現に関する数量的研究 箱庭療法学研究, 5 (1), 39-50.

Abstract

Exploratory Study of “Autonomy of Sandplay”

Yukari Ikeda

In a sandplay, we often make a sandplay that is not intentionally made. The feeling that one feels like putting a particular item although one does not know why, or that it feels wrong to put an item in any other places than a particular place, is thought to be related to sandplayer’s reconciling the sandplay setting (or existing miniatures) with the image floating within. In this study, the author calls sandplayer’s reconciling of sandplay setting with his or her images within as “autonomy of sandplay”. The author studied seven research participants’ experience of making a sandplay focusing on this “autonomy of sandplay”. As a result, the author clarified how the core image that the sandplayer is experiencing evolves and how the image spreads. Regarding the “autonomy of sandplay”, the author clarified the importance of sandplayer’s reconciling process of sandplay setting with his or her images within, and the process of “osameru (pulling things together)” into a sandplay while feeling some incongruence.